建築組パックス有限会社

大西社長の一日 同行ルポ

一級建築士が木を選ぶ宮大工が手刻みで作る

八戸市東白山台の建築現場に、クレーン付きの4トントラックが到着した。運転席から降り立ったのは、建築組パックス㈲の大西昇社長。荷台に積んであるカラマツのフローリングを大西さん自らが現場に下ろす。この光景を目にすれば、設計事務所の社長で一級建築士の大西さんが、なぜわざわざ自分でフローリングを届けるのか——誰しもそんな疑問を抱くだろう。大西さんは笑ってこう答える。

「普通なら大工が材木店に注文して、材木店が現場に運ぶ。それをあえて自分でしているのは、材木店任せにするのではなく、自分の目で選別したものを届けるためなんだ」

大西さんが運ぶのはフローリングだけではない。木材すべてだ。土台も、柱も、梁も、垂木も。自宅の隣の『倉庫』(八戸市

自らフォークリフトを運転して木材を積み込む大西社長

自分の選んだ木材を自分で運ぶのが信条だという大西社長

内)に寝かせてある木材の中から、それぞれの現場に使う柱や梁などを選び出し、それを『作業場』(南部町福地)へ運び、大工職人が修正挽きして鉋掛けをしたものを、今度は現場へ運ぶ。大西さんの〝眼鏡に適った〟木材だけが運ばれているのである。

「だから、手間賃かけて人に運ばせれば楽なのに、とよく言われるんだけど、単に物を運ぶのではなく、選んで運んでいるのだから、任せるわけにはいかないんだ」

これが大西さんの家づくりの信条である。クレーン付きトラックを運転する姿にそのこだわりが現れているのだ。

大西さんはブログで日記『こだわりの住まい』を書き綴っている。ひと月の愛読者はざっと2000人。その半数以上は同業か、関連業者が読んでいる、と大西さんは分析するが、家を建てようと計画している人、いわゆる潜在需要の目を意識するからこそ、一日の終わりに、事務所に戻って、ほぼ毎日パソコンに向かうのである。

2012年×月×日付のブログを見てみると――『現場が3か所になって、廻るだけで時間がかかる。今月完成予定が1か所、来月が1か所、11月が1か所と順繰りに出来上がる。その他にも手直しや細々したものが溜まっている。発注もあるし、製材所や現場への配達もある。家具などは図面がないと製作できない。設計屋なのに図面が間に合わないなんて』

とにかく忙しい。獅子奮迅の様子が伝わってくる。そのブログに、長男の大西洋平さんのことが登場するようになったのは昨年(2011年)からである。秋田の宮大工のもとで修行を積んでいた洋平さんが、八戸に帰ってきて一緒に仕事をすることになったのだ。神社仏閣など日本の伝統建築物の建築や修繕、復元を手がける宮大工の技が、パックスの建築現場に生か

されることになった。一級建築士が吟味して選んだ県産木材を、宮大工が手刻みで建てる家づくり。設計事務所として20年前にスタートした建築組パックス㈲が、工務店へ転身するターニングポイントとなった。

プレカット一切使わぬ職人技のノミとカンナ

洋平さんが棟梁として仕切る東白山台の現場には、細部に宮大工の技が生かされている。大西さんが説明する。

「屋根の軒先の垂木が、現しになっている。一般の現場では、軒先には下から有孔(小さな穴があいた)ボードを打ち付けているが、垂木も野地板(屋根板)も隠さずに外に現している。この〝垂木現し〟の作りは、宮大工にとっては普通のことだ。それと、『刀刃(かたなば)』(斜めに削った板の縁)といって、屋根の軒先や妻(つま)側(がわ)(建物の側面)に、トタンの雨の切れを良くする〝跳ね上げ〟を付けてある。これも一般住宅ではまずない」

教えてもらって初めて分かる伝統的な職人の技術も知識も、機械によるプレカットの家づくりには無用のものになってしまったのだ。

「大手に対抗する、と簡単に言うけれど、土台、力では大手に対抗できるわけがない」

大西さんはそうみる。資本力が違う。販売力、宣伝力、デザイン力も違う。ケタが違うのだ。では、どうするか。大手が使っているサイディングや合板など大量生産の建材を一切使わず、自社で作る。カラマツやアカマツなどを『加工屋』(八戸市のZ工芸)へ持って行ってフローリングなどに加工してもらう。乾燥して割れたり、反ったりした部分

宮大工の技術が随所に活かされた屋根の軒先

東白山台の新築現場。外には「地産地消の家づくり」の看板が

板を加工屋に運んでフローリングなどに加工してもらう

宮大工の修行を終えて帰ってきたご長男の大西洋平さん

を除いて作るので材料に〝すたれ〟は出るし、運ぶ手間もかかるから材木店に注文した方が早いのは百も承知だが、大西さんはこの一線を崩さない。それが地元工務店の生きる道だからだ。

そんな大西さんを支援する仕事仲間の一人が『加工屋』だ。「おやじさんとの出会いが大きかったね。初めはあいさつもしない無愛想な人だったけど、物を熟知した職人というのはやはり無口なものなんだね。木のことなら何でも知っている。博士だ。ものすごい人と出会ったもんだ。木のことはこのおやじさんから学んだ。それ以来、フローリングにしても、テーブルの天板にしてもここに頼んで作ってもらっている」

かけた手間ひまは、その家に暮らすお客様の満足感に届く。

家づくりに忘れられてきた作り手の思いを、大西さんは今日もパソコンに向かってブログに綴る。

PACS
Perfect Architecture Consulting System

建築組パックス有限会社

八戸市大字新井田字石動木平1-1
TEL.0178-25-6020 FAX.0178-25-5542
http://www11.ocn.ne.jp/~pacs
E-mail:pacs@sage.ocn.ne.jp

企業組合 県木住

古川 和弘 様邸 ユーザー訪問

DATA
青森市佃
2012年7月竣工
■延べ床面積／35.66坪（118.13㎡）
■使用青森県産材／ヒバ（土台）、スギ（柱、床、建具）、アカマツ（梁）。

家は性能も大事だが、完成するまでの〝過程〟の方がより重要である。県木住はその考えに立つ。近くの山から伐り出した木で建てることが、森林整備を促し、木材の循環により地域活性化にもつながる。地産地消の必要性を、お客様にも理解していただこうと実施しているのが、施主自らスギ大黒柱を伐り倒すチェンソー体験。家族もまた、外壁や床板の塗料塗りなど家づくりの〝過程〟に参加することによって、地元の木で出来上がった我が家への愛着が増す。『地域あっての家づくりこそ地元工務店の役割』とする県木住の姿勢に賛同して完成した1軒が、古川和弘様邸である。

出会いはホームページ 真摯な企業姿勢に好感

ご主人の話　私はログハウス、妻は県木住。どっちにするか、二者択一でしたね。単身赴任先の仙台から昨年（２０１１年）

黒い外壁とのコントラストが美しいウッドデッキ

転勤で青森に帰ってきて、まずは私の希望するログハウスを見に、県南の階上町まで行ってみました。一般の住宅とログハウスとでは外観が明らかに違うじゃないですか。丸太を積み重ねたあの外観のイメージが頭から離れなかったんですが、いざ具体的に建てようとしたときに、問題にぶつかりました。

希望する間取りがうまく取れなかったんです。子供は娘と息子の2人いまして、それぞれ自分の部屋が必要ですし、リビングは吹き抜けにして、その隣には小上がりの和室をつくる

――そんな間取りにしたいと思っていたんですが、ログハウスって一つの空間を広く使うのには向いているけど、部屋を区切って取ることには向いていないのですね。階上町から来ていただいた営業の方と打ち合わせしていて、だんだんとそのことがはっきりしてきたんです。

スギのぬくもりに包まれた開放感あふれる吹き抜けのリビング

奥様の話　それでも、主人はログハウスのことを諦め切れないようでしたけど、間取りのことが壁になって先へ進めないようでしたし、一度、県木住に行って相談してみようよ、って主人と一緒に事務所を訪ねてみることにしたんです。それが昨年の9月でした。事務所に行ったのは初めてでしたけど、実はその数か月前に、県木住の佐藤さん（佐藤時彦理事長）とはお会いしていたんです。県木住のホームページに載っていた「建築ポリシー」から真摯な姿勢が伝わってきて、好感を持ちましたので、資料請求のメールを送信したら、佐藤さんがわざわざ届けてくれたんです。同封されていた、横書きのレポート用紙にぎっしり書かれてあった佐藤さんの手紙からも、真面目さと熱意が伝わってきました。

ご主人の話　手紙は私も読ませてもらいました。「古川様の家づくりにわれわれも〝事業共

リビングに隣接する和室の小上がり

書斎にもなる木に囲まれた階段ホール

小上がりに続く洗面室にもスギがふんだんに

同体〟として参加し、古川様のご家族様もまた内壁のしっくい塗りなどをしていただいて共に家づくりを楽しみましょう」とあって、自分たちも工事に参加して家を建てるんだって、実感がわいてきましたね。

時間かけて触れ合う いい人間関係を築く

佐藤理事長の話　家づくりにおいてハード面（性能）の次に大事なのは、ソフト面（心の満足）だと考えます。断熱とか気密とかの数値で住宅性能の高さを示したり、○○工法などという話は相手に伝わりやすいですが、ソフト面の話となるとアピールしづらく、工務店としてはその大切さを伝えにくい部分なんですね。でも、そのソフト面にこそ、お客様が満足して長年その家に暮らしていく要素が詰まっていると考えるのです。お施主様に、チェンソー体験や、内壁のしっくい塗りなどに

内壁のしっくい塗りに参加するお嬢さんと奥様（右）

大雪の中、チェンソーでスギを伐り倒したご主人。切り口に「古川」と名前を書く

参加していただいているのは、注文者、請負者の垣根を越えて、一緒に家づくりをするんだという気持ちを共有しようと思うからです。いい人間関係が、いい家づくりにつながるはずです。じっくり時間をかけて触れ合ってこそいい人間関係は築けます。そう考えると、「家づくりはスローで」がいいということになりますね。

ご主人の話　1月の下旬にチェンソーでスギの樹を伐ったんですが、大雪でした。腰までの雪やぶをこぎながら杉林に入って行くうちにも顔に雪が吹き付けてきて、初めてチェンソーで伐り倒したことより、猛烈な吹雪の方が印象に残っていますね。

奥様の話　わたしは参加できませんでしたけど、チェンソー体験の写真見て、感激しましたよ。お父さんが家を建てるために頑張ってくれているんだって。

ご主人の話　この夏から暮らし始めてまだ1か月ですが、ログハウスでなくても、外壁にも内壁にも板が貼られていて充分に〝木の家〟です。それに「県産材エコポイント」を活用して作っていただいたスギの建具の色合いも、しっくい壁と調和して、見ただけで涼しさを感じるのですから、エコですね。

息子さんが抱っこするワンちゃんもご満悦の古川様ご一家

企業組合 県木住

宮本敬樹 様邸

ユーザー訪問

DATA
東津軽郡外ヶ浜町
2012年11月竣工
■延べ床面積／31.74坪（105.16㎡）
■使用青森県産材／ヒバ（土台）、スギ（柱、床、外壁）、アカマツ（梁）。

施主の宮本様ご一家。元気なお子さんたちは裸足でスギ床を走り回っている

宮本敬樹様と県木住の出会いは、青森市幸畑に以前あった「常設展示場」であった。今から10年前のことで、床一面に貼られていたスギ板が目新しかったという。足裏から心地よく伝わる柔らかさは、表面がピカピカだけど堅くて冷たい合板フロアとは異質で、自然な温かさがあった。傷が付きやすいとして敬遠されがちなスギをあえて床に使って無垢材の良さを訴えた県木住の〝木を生かした〟家づくりに宮本様は共感を覚えた。柱や、家具、建具もスギだった。木目がきれいで、触れれば肌にしっとり馴染むスギに魅せられた。それから10年の歳月を経て、津軽線蟹田駅西口に完成した黒いスギ板貼りの宮本様邸は、外にも内にもスギを豊富に使用した、県木住の創業以来100棟目を飾るにふさわしい〝青森スギの家〟である。

山の神が恵んだ大黒柱 8寸角4面無節のスギ

ご主人の話　展示場を見に行ったのはオープンして2年目くらいで、山の中の別荘のような外観がまだ真新しかったのを憶えています。新聞とかテレビでオープンしたことを知っていて、それで見に行く気になったのでしょうが、建てる予定はまだまだずうっと先のことでしたから、後学のために、というような軽い気持ちでふらりと訪れたのでしょう。玄関に入ると、「木」が視界に飛び込んできました。そんな感じでしたよ。床が木、腰壁も木、吹き抜けに梁が見えていて、その上部の天井（勾配天井）も板が貼られています。見えるものが全部「木」でした。実は、それ以前に、何軒か建ち並んでいるハウスメーカーの展示場を見学したことがあったんですが、それらの造りと県木住の展示場とでは、別物でした。端的に言えば、県木

住の展示場は「木」が見えていたのに対し、ハウスメーカーの方は「木」が見えなかった――ということになりますね。木の見える方に私は惹かれました。すっかりスギが気に入ってしまって、新婚旅行で屋久島のスギを見に行ってきましたよ。

佐藤理事長の話　宮本様邸のシンボルは、2階まで伸びる8寸角のスギの大黒柱です。4面とも節のない、きれいな柱が取れました。「宮本様は恵まれたのだ」と私は思っています。青森市郊外の林で宮本様ご夫婦にチェンソーでスギを伐倒していただいたのですが、その林は、枝打ちや間伐などの手入れが行き届いていない、いわゆる普通の人工林で、その中から伐り倒した木を製材すれば、枝の跡の節が現われるのはごく当たり前のことです。節が出ないようによく手入れをした林からは

家のシンボルにもなっている8寸角のスギの大黒柱

変化に富んだ構造が印象的なリビングルーム

無節の良材が取れるわけですが、放置しておけば、節が出て当然です。ところが、宮本様の奥様が伐り倒したスギからは、4面とも無節の見事な大黒柱が取れたのです。100棟記念に山の神が恵んでくれたとしか言いようがありません。

奥様の話　10年の間に、県木住の完成見学会は何回も見させていただきましたよ。20軒くらいは見たんじゃないでしょうか。主人がスギに惚れ込んでしまって、他社の家は1軒も見ませんでした。拝見した中で特に気に入ったのがU様（青森市自由ケ丘）のお宅でした。キッチンから1階の全部が見渡せる開放的な造りが良かったですね。吹き抜けも、薪ストーブも気に入りました。そのままわが家に採り入れましたよ。

薪ストーブの暖かさが解放した1階の和室にも行き渡る

フルコースで施主参加 家族でホタテ漆喰塗り

佐藤理事長の話　家づくりは施主と工務店との共同作業だと考えます。お施主様に工事途中で床板の塗装や壁塗りなどに参加いただくのはそのためです。外壁の塗装は2回で、1回目は板に塗り、次は外壁に貼った段階で塗って仕上げるのが標準なのですが、宮本様は熱心で、自主的にもう1回多く塗られました。壁の面積ってかなりあるので刷毛で1枚1枚塗るのは結構しんどい作業です。3回目の塗装は我々が手伝うことなくお一人で塗られたのです。自分の家を長持ちさせたいという気持ちで頑張られたの

奥様お気に入りの薪ストーブ

真夏に黙々と外壁を塗装するご主人

県木住オリジナルデザインのトイレットペーパーホルダー（上）と
タオルハンガー（下）

だと思います。愛着の深さですね。

奥様の話　木製のトイレットペーパーホルダーと洗面所のタオルハンガーは、県木住デザインのオリジナル品だそうです。それで、うちの主人も、県木住から前に粗品として頂戴していたスギのまな板を使って、日曜大工でオリジナルの郵便受けを作りましたよ。

佐藤理事長の話　今回、宮本様邸の塗り壁に初めてホタテの貝殻を活用したホタテ漆喰を使いました。コスト的にやや高くつくのですが、環境対策のためならとご主人のご理解を得て採用しました。その壁塗りにもご家族で参加いただきました。

チェンソーでの大黒柱伐採を始め床塗りや壁塗りなどフルコースの施主参加で完成した宮本様邸は、宮本様の10年越しの想いと、県木住の１００棟の集大成にふさわしい家になったと感じています。

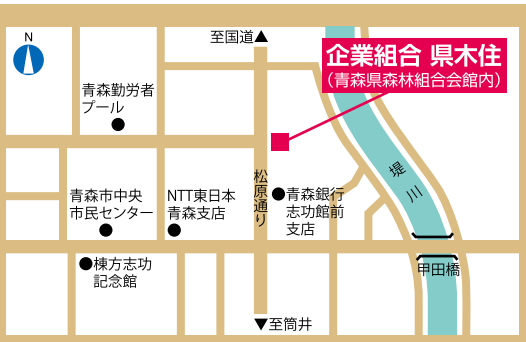
近くの山の木で家をつくる　企業組合

県木住

企業組合 県木住

青森市松原1丁目16-25（青森県森林組合会館内2F・3F）
TEL.017-732-5333　FAX.017-732-5777
http://www.kenmokujyu.com　E-mail : info@kenmokujyu.com

■第5回あおもり産木造住宅コンテスト特別賞受賞



有限会社 桜庭工務店

A 様邸

ユーザー訪問

DATA
五所川原市
2011年10月竣工
■延べ床面積／60坪（198.74㎡）
■使用青森県産材／ヒバ（土台）、スギ（柱、床、一部外壁）など。

展示場や見学会などあちこち見て歩いた中で唯一、A様の奥様にアレルギー反応が現れなかったのが、桜庭工務店の住宅であった。ビニールクロスの接着剤などに含まれる化学物質に拒否反応を示すアトピーのある奥様にとって、工務店の選定にこれ以上の〝決め手〟はない。落ち葉が散り敷く広い敷地内に木立に囲まれて建つA様邸は、奥様がアトピーから解放されて伸び伸びと暮らす〝桜庭工務店が建てた〟家である。

アレルギー反応なし 桜庭工務店の家だけ

ご主人の話　結婚後は、親の家に増築して、そこに住んでいました。増築した時点で、それから10年後くらいには新しく二世帯住宅に建て替える計画をたてていました。親の家は、もともとは曾爺（ひいじい）さんが建てた家で、かなり古くなっていましたけど、テレビ番組の『ビフォーア

広い敷地内に木立に囲まれて建つA様邸

フター』の影響もあって、残せるところは生かして使おうとリフォームも検討しました。私が生まれ育った家でもあるし、代々受け継いできた歴史も刻まれているから、壊してしまうのは惜しい気持ちが強かったんです。桜庭さん(桜庭尚利社長)にもお手伝いいただいてリフォームのプランをいろいろ作ってみてもらったんですが、どうしても間取りを組むのに制約があって不都合な点が出てきたので、新しく建てることに決めたんです。

奥様の話　新聞で見た、ある工務店の見学会の広告に〝健康住宅〟と書いてあったのに、玄関から一歩中に入ったら、あの化学物質の嫌な臭いがしたんです。もうそれだけで拒否反応ですよ。室内の見える所にだけは板を張って、それで〝健康住宅〟と謳っているんですね。ところが、桜庭さんの見学会だけは違いました。リフォームの現場と、新築の現場2軒を見学したんですが、まったくアレルギー反応が出なかったんです。わたしがアトピー、子供が喘息なので、きれいな空気が吸える家を以前からずうっと探していたんです。桜庭工務店の見学会で、念願の家に出会えました。

ご主人の話　全国版の住宅雑誌に掲載されていた、仙台の自然素材の家に目が留まりました。5年ほど前のことです。その家には、うちと同じにアトピーや喘息を持つ家族がいて、化学物質の臭いから解放された自然素材の安心な住み心地が紹介されていました。こういう家に住みたい、って強く思いましたね。それで、青森県にも

県産材をふんだんに使用した安心してすごせる住空間

障子を開ければリビングと一体になる小上がりの和室

2階には梁が現わしになった“木組み”の空間が広がる

自然素材を使った家づくりをしている工務店がないだろうかと、インターネットで検索してみたら、『新住協』(新木造住宅技術研究協議会＝高断熱高気密を住宅に必要な基本性能として捉え、省エネで快適な住まいづくりを目指した住宅技術研究団体)がヒットしました。その会員の中に、弘前市の桜庭工務店があったんです。

工事過程を写真で記録 施主にアルバムを贈呈

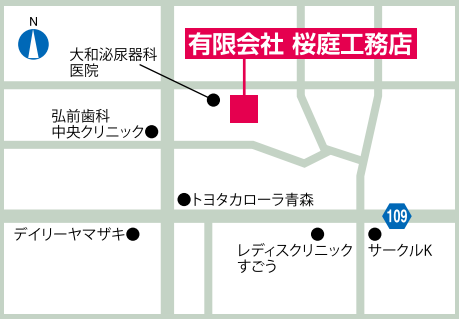
奥様の話　初めて桜庭さんの見学会を訪ねたのは3年前です。リフォームの現場でした。さっきもお話ししましたように、中に入っても、症状が出なかったんです。やっと探していた家を見つけた思いでしたね。そのときに桜庭さんとも初めてお会いしたんですが、桜庭さんは奥様を引き立てるように一歩後ろに立っていて、謙虚な方だなって思いましたよ。奥様はとっても明るくて、笑顔の良いお方で、建物について丁寧に説明してくれました。断熱や工法とかの話になると、桜庭さんが

見ていると心まで暖まる薪ストーブの炎

代わって、Q値（断熱性能を数値で表した熱損失係数）とかの説明もしてくれました。勉強熱心な方だという印象を受けました。

ご主人の話　桜庭さんはブログで現場の進捗状況を紹介しているんです。布基礎を打つ様子や、基礎断熱に使う断熱材の厚さとかを詳しく、完成するまで紹介しています。完成見学会でも構造見学会でも基礎の部分は見えませんから、そこを、ブログを通じて公開するということは、工事に自信があるということよりも、工務店としての誠意を感じましたね。それと、嬉しかったのは、家の完成後に桜庭さんからアルバムを頂いたことです。家の解体から、基礎工事や大工工事などの様子を小まめに写した写真アルバムです。表紙に書いてある『自然を楽しむ家』とは、わが家のことで、桜庭さんが命名してくれたんです。写真には、解体した家の木材を加工して使った柱や梁も映っていて、昔の家のことが懐かしくよみがえる記念にもなります。桜庭さんはお客様全員にアルバムを贈呈しているんだそうですよ。

四季を通じて自然が堪能できる『自然を楽しむ家』。広いテラスはお子さんたちの遊び場にも

奥様の話　今年の12月には3人目が生まれる予定です。（窓の外のテラスを指差して）そこにブランコでも作ってあげようと思っています。幅が広い所で1間半（約2・7メートル）もありますから、遊び場にもなりますし、バーベキューもできるし、黙って座っていても周りの新緑や紅葉が楽しめますしね。〝自然が楽しめる〟場ですよ。

『気創りの家』
有限会社 桜庭工務店
弘前市大字外崎4丁目2-6
TEL.0172-27-4320 FAX.0172-27-4325
http://saku-kou.com
E-mail:sakura52@amber.plala.or.jp